

2012年12月から昨年12月までの1年間スリランカのケラニヤ大学で日本語を教えてきた。1年ほどの短い期間であったが、この1年間を振り返ってレポートしたいと思う。

スリランカには大学の数が20数校あり、すべて国立大学である。その中で専門的な日本語学科があるのはケラニヤ大学とサバラガムワ大学である。もちろん他にも日本語や日本に関する初歩的な講座がある大学はコロンボ大学をはじめいくつかの大学にあることはあるが、正式な日本語学科があるのは上記の2校のみである。

スリランカでは教育費は公立ならば小学校から大学まですべて無料で、個人的な費用のみを払うだけである。私立の学校はすべての費用は払わなければならないので、余程の金持ちでもない限り私立学校に行く学生はほとんどいない。

この国では日本語を学ぶ学生は数の上ではそんなに多いとは言えないが、一番人気のある外国語だと言えるだろう。ただ、最近では中国語や韓国語を学ぶ学生が増え、ケラニヤ大学でもこれらの言語を学ぶ学生は増加している。

その理由として、中国と韓国のスリランカへの進出がある。これらの言語を知っていれば、就職するのに有利だという理由であるが、それだけでなくこれらの国は中国語や韓国語を学ぶ学生に奨学金を与えて自国への留学を積極的に進めていることがある。日本はこうした面で遅れているような気がするが、どうだろうか。テレビを見てみると、毎週1回のように、それぞれ中国語と韓国語の語学講座が行われている。かつては日本語講座もあったようだが、今は行われていない。

学生には留学や研修で日本へ行く機会も与えられているが、その数はやはり限られている。2、3年生の中には日本語を学んでいる学生でありながら中国と韓国に留学する学生が毎年何人もいて、帰国後はこれらの言語を教えていたりしている例もある。

私が教えていた学生たちの中で、東京外語大学、金沢大学、埼玉大学、宇都宮大学、創価大学などの大学に留学した例もある。その他にも短期の研修旅行で出かけた学生もあり、彼らは帰国後日本語能力が一段と目覚ましいことは言うまでもない。

ケラニヤ大学日本語学科でもう一つ気が付いたことは日本語学科が有する設備が古いことだ。LL教室があるが、これはもう20年以上も前にJICAの寄付で作られたもので、今では全然機能を果たしておらず、わずかにパソコンをケーブルでつないで映画や映像を見ること



1年生全員と共に(筆者前列中央)



帰国前の送別会にて

ができるだけである。

中国語や韓国語学科は最新の設備を備えた教室をそれぞれ持っていて、それに比べると日本語学科の貧弱な設備には驚くばかりである。中国語教室には一人一台の割でパソコンも備えられている。幸いにして、日本語学科では来年度には新たな設備を持つLL教室が作られるという話を聞いた。

このようなことはさて置いて、ケラニヤ大学での実際の日本語教育について述べてみたいと思う。

ケラニヤ大学は3年制だが、日本語学科は全体で130人位いる。学生の98%は女子学生で、男子学生がほんの数人いるだけだ。日本語教師は日本人が5人(私を含めて)、スリランカ人が5人いる。私が担当した教科は「漢字」(1年生と3年生の各2時間)と「日本文化」(1年生と2年生の各1時間)で、計6時間である。他に「会話」、「読解」、「日本語教授法」、「文学」、「文法」の授業があり、別の先生方が教えている。

都市部の高校ではどこでも初級・中級程度の日本語教育が行われているので、学生達は大学に入る前に日本語を数年間習ってきており、すでにA Levelの段階(日本の高校卒業段階と同じ)の能力がある。従って、ある程度の知識と能力は持っているが、ほとんどの学生は漢字が苦手だと言

ながらもかなり読むこともでき、音読み・訓読みの区別も分かる。ただ書き順や細かい部分の書き方などが微妙に分からないようで、黒板に書いてもらおうととんでもない書き順で書いている学生がいたりする。テキストはKanji in Context(Japan Times 出版)を使ったが、学生はすべてコピーしたものを使用していた(違法コピーになると思うが)。

「日本文化」についてはテキストのようなものはないので、すべて私が考えて作った。例えば、日本料理、茶道、折り紙、NHK紅白歌合戦、

正月、映画、アニメ、スリランカ料理を日本人に紹介する、といったようなテーマを私が作った画像や日本から持参したビデオなどを用いて紹介し、それらを基にさらに学生に調べさせ、まとめをし、発表するというようなことを行ってきた。学生は料理、ファッション、映画、アニメなどに関心があり、大いに役立ったようである。

学生は概ね意欲的であるが、やはり能力的に多少の違いはある。また、おとなしいというかシャイな学生が多く、質問などもこちらが聞いてやらないとなかなか尋ねこれはてこないということが多かった。これは国民性にもよるかもしれない。

スリランカの学生は語学的センスが良いのかどうかかわからないが、2年位勉強すると、話すことは概ね問題なく話せるようになる。シンハラ語と日本語が文法的な面や発音が似ているという面もあるのかもしれないが、上達が早い。日本の大学生が中学・高校ですでに6年間も英語を勉強していながら、話すこともできないのと対照的である。

この1年間は私にとっては楽しくもやりがいのある期間だったと言えるだろう。

文化や習慣の違いに戸惑いながらも、何とか有意義に教鞭をとることができたのもスリランカという国とその人々への関心があったからだと思っている。